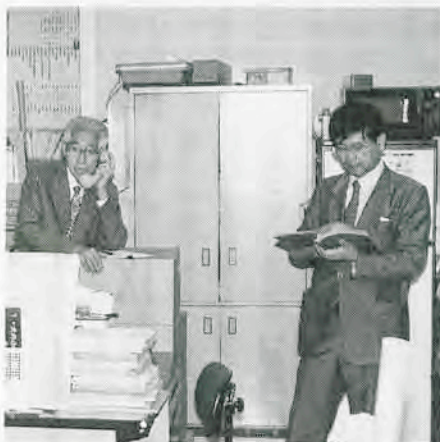


かたりべ 35

豊島区立郷土資料館だより



尾佐先生の記録をもとに、一緒に疎開された方の消息をたずねて電話をされるお二人。今後の調査の方向を教えてくださいました。



熱心に話される尾佐先生(右)と佐原さん。

姨捨の中服駈ける白煙

東京行きと誰かささやく

これは、戦争中、空襲を避けて長野県屋代町(現長野県更埭市)に集団疎開をした池袋第二国民学校六年生のつくった歌です。伝説で有名な姨捨山(冠着山)を篠ノ井線が走っているのが、屋代から千曲川をはさんで、今でも見ることができます。

この歌の作者は、『騎馬民族は来なかった』(NHKブックス)などの著書で知られる考古学者の佐原真さんです。佐原さんは日本の勝利を信じて疑わず、親や東京と別れての疎開にも積極的に参加し、さびしさは感じた記憶がないそうです。それでも、「東京行き」の語には何か思いがあったのかもしれない、とも話されます。

佐原さんたち六年生は卒業のため、一九四五(昭和二〇)年三月九日、屋代を出発、東京へ向かいます。待っていたのは一〇日の東京大空襲でした。この後、空襲は激化・拡大し、疎開児童も移動や分散を余儀なくされます。

郷土資料館では去る六月一日、佐原さんと、疎開に付添われた恩師である尾佐卓朗先生から、お話をうかがいました。尾佐先生は疎開政策が決まる前から集団疎開の必要性を主張されていたそうです。また、尾佐先生が当時書かれた詳細な生活記録である『学童集団疎開記録』を寄贈していただきました。

(青木)

特集 新館設立に向けてⅨ

博物館の仕事ってナニ？ (3)

史料集を刊行する

「豊島区」という地名は、古代からあった豊島郡という行政区分をその名のもとにしていきます。豊島郡は、現在の台東・荒川・北・板橋・練馬・豊島・文京・新宿区、及び港・渋谷・千代田区の一部を含む東京都のほぼ半分の地域にあたります。古代末〜中世の豊島郡には、豊島氏という武士が勢力を持っていました。豊島氏の本拠は北区の西ヶ原周辺で、現在でもある平塚神社がその初期の館跡であるといわれています。室町時代になると練馬区の石神井城をその本拠としますが、江戸城に入った太田道灌と対立して合戦に敗れて滅亡します。

郷土資料館では、この豊島区ゆかりの豊島氏の関係史料を収集して刊行することを目的として、約一〇年程前から継続して事業を行ってきました。その成果は、中世豊島氏関係史料集として『豊島・宮城文書』・『豊島氏編年史料Ⅰ』の二冊の史料集になっています。そして、現在『豊島氏編年史料Ⅱ』の編集作業を今年度末の刊行に向けて精力的におこなっています。

そこで、今回の「博物館の仕事ってナニ？」では、こうした史料集ができるまでを紹介することにします。

Ⅰ 収集とカード化

『豊島氏編年史料』の作成の手順としては、まず関係史料の収集から始まります。最初に刊行した『豊島・宮城文書』は、国立公文書館に所蔵される豊島氏関係の基本史料である「豊島・宮城文書」全点の詳細な調査を行い、文書の読み・形態註・解説などをつけて写真とともに紹介したものです。そのため広範囲にわたる史料収集の作業は必要ありませんでしたが、『豊島氏編年史料』の場合はいわば豊島氏関係史料の悉皆調査とでもいったものであり、どれだけの関係史料が収集できるかが史料集の勝負どころになります。そこで、とにかく史料を探し出すことから始めるわけです。その最初の作業がいわゆる「史料めぐり」といわれるもので、従来刊行されている史料集から豊島氏に関わる史料を抜きだす仕事になります。最近では中世関係の史料集の数も増え、この作業はかなりやりや

すくなったとはいえ、膨大な量の「史料めぐり」は、やはりたいへんな作業になります。

「史料めぐり」の対象としては、『大日本史料』という東京大学史料編纂所を中心に明治時代から編纂・刊行を継続している、膨大な編年史料集からはじまり、鎌倉時代の文書をすべて収集した記念碑的な業績である『鎌倉遺文』及び現在刊行中の『南北朝遺文』や『戦国遺文』といった中世の基礎的な史料集、そして『埼玉県史』・『神奈川県史』や、最近刊行された東京の中世についての非常に良質な史料集である『北区史』といった県市区町村史類が主なものになります。また、日本の書物のレファレンスブックともいえる『国書総目録』を水先案内人として、『正・統群書類従』などに所収される記録類などを総めぐりして、豊島氏の関係史料を収集します。さらに刊本になっていないものについては、東京大学史料編纂所などの史料保存機関に所蔵される影写本や写本を調査したり、直接原本にあたったりすることによって搜索するわけです。

このような調査は、ただやみくもに本をめくれば関係史料にあたるというものでもなく、事件を追う刑事のように、経験と勘によって史料から史料へと追い詰めていくわけです。この作業は多くの労力を必要としますが、いわば宝さがしや犯人さがしのような面白さもあり、苦勞してしままであまり知られていないような関係史料を見つけた時は、思わず祝杯をあげたくなくなってしまいます。

『豊島氏編年史料』の場合は、若手及び元若手の研究者のグループが、中世豊島氏研究会として共同研究を行なっています。その研究会の



豊島氏の子孫で近江天領代官豊島忠次を祀る豊島神社の調査風景（滋賀県長浜市）

メンバーが、それぞれ分担してこの史料収集作業を進めていくわけですが、メンバーが新しい史料を見つけた時には、研究会後のビールが夕ダになるというのが慣例になっています。

その次の作業としては、収集した史料を所蔵者名や史料集名等のデータを含めてカード化します。この史料カードが増えてくると史料集刊行への希望が湧いてきますが、いつまでたってもカードの数が増えないとだいに暗い気持ちになっていきます。そういう時は仕事帰りに一杯やって気をとりなおして、翌日から宝さがしならぬ史料さがしに励むことになります。

II 原本調査

収集・カード化と平行して、収集した史料の「もとあたり」を行ないます。郷土資料館で刊行する史料集の場合は、できる限り原文書にあたって調査するというのが基本方針です。そのため、所蔵者の方に史料の閲覧をお願いすることになります。中世の古文書は、貴重な文化財です。大部分の所蔵者の方には快く閲覧を許していただけますが、史料の保存上閲覧できない場合もあります。その場合は、影写本という手書きの複写本にあたることになります。

原文書調査の場合には事前に依頼し、許可を受けてから行ないます。調査の際には、文字の読みばかりでなく、寸法・紙質・筆跡その他の



豊島七右衛門が討ちとった佐野宗綱を供養する鎧地藏（足利市金蔵院蔵）

所見をできる限りカードに記載します。このデータは、文書が本書（中世に現実に作成され、機能したもの）か、または後世に写されたものかなど、文書について考察する際の基準になりますので落とせません。文書の閲覧の後に、可能ならば写真撮影をして調査を終了します。

現在、ほぼ月一〜二度のペースでこのような史料調査を行っています。編年史料集の文書調査地は全国に広がり、今年度はいままでのところ古河市博物館・埼玉県立博物館・愛知県西尾市立図書館・京都大学図書館・お茶の水図書館・早稲田大学図書館・岩槻市浄国寺などにお世話になりました。

III 編集から刊行へ

その後、作られたカードをもとにして史料の原稿化を行ないます。以前は原稿用紙に原稿化していましたが、現在ではワープロの普及によってワープロに打ち込んでいます。史料集作成ではこの原稿化の作業が一番労力と時間がかかります。しかし、ワープロですので一度打ち込ん

でしまえば、自由にレイアウトや編集ができませんのでかなり便利になりました。

ワープロへの史料の打ち込みと同時に、史料の配列作業を行ないます。中世の史料集にはさまざまなタイプがあり、史料の配列の方法も所蔵者別、編年順、テーマ別といったやり方があります。これは、それぞれの史料集の対象史料や地域の特徴によって方針を決定するわけです。『豊島氏編年史料』の場合は、その名の通り史料を編年順に整理します。豊島氏関係史料を全国的に網羅し、豊島氏の歴史的動向を明らかにすることがこの史料集の目的であるために、編年という形式をとったわけです。

編年体をとる場合に問題になるのは、無年号文書の扱いです。ことに、戦国時代の書状には無年号の文書が多いため、どの位置に配置するかは、文書内容や花押（文書を出した人のサイン）型などから判断するわけです。最近では関東の戦国時代の研究が従来に比べて飛躍的に進んでいるために比較的年次が判断しやすくなった反面、逆に精密さが要求されるようになったともいえ、この年次比定の作業はたいへん神経を使います。そこで、専門の研究者に教えを請う場合もあります。

打ち込まれた収集資料が編年順で並んでくると、次にそれに編文をつける作業を行ないます。

編文とは、史料一点一点につけられた簡単な内容紹介です。史料集を利用する人は、この編文を読んで大まかな内容を知ることができるわけです。この史料集では豊島氏に関する地域史料集という性格上、できるかぎり豊島氏や豊島区地域を主体にして編文を付けるという方針をとっています（例えば、後北条氏が豊島氏に援軍を要請した、というのではなく、豊島氏が後北条氏によって動員された、というようにする）。この事は、一見どうでもいいようなことなのですが、地域の歴史の掘り起こしをするという郷土資料館の存在理由にもかかわらず重要な点であり、地域主体の立場を忘れることはできません。

編文が付けられ、史料が編年順に配列されると、史料集もだいたいぶ形になってきます。あとは史料中の地名・人名の横に注をつける作業と関係地図・年表などの作成及び解説執筆が残っています。解説については、豊島氏研究会のメンバーが分担して担当し、月例の研究会での報告をもとにして執筆します。豊島氏についての最新の研究成果を盛り込むように、それぞれのメンバーは最大限の努力を払っています。

本文及び解説などの原稿がそろったところで入稿になります。ここで一安心といったところですが、校正のゲラが送られてくるとまた忙し



歴史講座「豊島氏の謎にせまるー『豊島氏編年史料Ⅰ』を読むー」の実施風景（1992年7月）

くなります。史料集の場合ではできるかぎりの精密さが要求される性格のもので、校正も再び原本の写真にあたって対照し校正するということとなります。このような、校正作業を何度か繰り返ししたところで校了（こうりょう）になります。そして、印刷・製本ののち、めでたく完成という運びになり、研究会のメンバーと職員も含めて打ち上げということになります。

このようにうまくいけばよいのですが、現在編集作業のまっ最中で奮闘努力中というところ。多くの時間と手間がかかり、史料所蔵者・機関の方々の好意によってできる本です。『豊島氏編年史料Ⅱ』が刊行された際には、是非お手にとっていただければ幸いです。（コバ）

町工場まちこうばの履歴書りれきしょ〈あなたの知らない町工場の歴史がみえる〉

9月9日(金)から11月20日(日)まで

今回の展示会では、豊島区地域の町工場をとりあげ、都市化の問題を考えてみたいと思います。題して「町工場の履歴書」。

池袋という繁華街を抱える現在の豊島区から、「町工場」をイメージすることは少し難しいところかも知れません。ところが豊島区内には現在約二千社の工場があり、その半数は、印刷製本関連の工場で占められているのです。今日区内で活躍する、あるいはかつてあった町工場のおゆみをたどっていくと、それはまさしく、武蔵野台地に位置する近郊農村であった豊島区地域の都市化のあゆみであることに気づきます。

展示会では、地場産業である神田川の染色業が工場地帯に変わってゆく明治・大正期から、戦災で区内の工場の大半が焼失する昭和二〇年までの町工場のおゆみを中心に見ていきます。

あわせて私たちの生活や豊島区の景観がどのように変わっていったのかということもふれてみたいと思います。

【展示内容の見どころ】

Ⅰ 乾し場のある風景 ― 神田川と染色業 ―
文政期(一八一八〜二九年)から高田で商い

を続けてきた大坂屋染物店の藍麩あいにびなど紺屋関係資料のほか、これまであまり知られていなかった板橋区日曜寺の愛染信仰

について取り上げます。また現在の染工場の実態を、武蔵屋染工場の調査から見えていきます。



昭和初期の神田川の乾し場風景

Ⅱ 田畑から工場へ ― 国産品の開拓者 ―

明治末期から大正初期にかけて、東京市内の工場が、広大かつ安価な土地を求めて郊外の豊島区地域に移転します。ここでは金門商会(ガス・水道メーター製造)、永田メリヤス機械製作所、快進社(ダット自動車製造)の三工場を取り上げ、具体的にみていきます。

特に快進社は、日産自動車(株)のダットサンの前身である国産自動車ダット号を開発し、今日の自動車産業の「種蒔き」の役目を果たした工場として注目されます。その関係資料はこ



旧目白通り沿いにあったダット自動車商会

の展示会が初公開となる貴重なものばかりです。Ⅲ 豊島と町工場 ― くらしのなかの産業 ―

第一次大戦以後、神田川流域を始めとして、区内に数多くの中小工場が誕生しました。これらの中にはその後中・大企業に発展するケースもあれば、時代の波に翻弄はんろうされ消えていった零細工場も数多くあります。ここでは代表

的な工場についてその歴史を詳しく見ていきます。

今回の調査では、池袋が戦前まで鉄工所と鋳物工場が集中する工場街であったことについて幾つかの発見がありました。特に大正中期から昭和初期に池袋の鉄工所が製造した英国式旋盤が、上池袋の鉄工所に残されていたことは大きな発見でした。この旋盤のように企業や個人が所蔵し、これまで日の目を見なかった資料ばかりを、関係者のご好意でお借りして展示することになりました。

- (1) 鉄工所と鋳物工場のまち・池袋
- (2) 砂利場工場のさががけ―脱脂綿工場―
- (3) 豊富で良質な水をもとめて―東洋乾板から富士フィルムへ―
- (4) 万年筆の水先案内をめざして―並木製作所から―パイロットへ―
- (5) 夏の風物詩―同志舎の水屋さん―
- (6) 西洋菓子への挑戦―ドロップスからチョコレート―



並木製作所の烏口ポスター(パイロット筆記具資料館提供)

IV 戦争と町工場―民需から軍需へ―

第二次大戦下、工場は統制経済や企業整備令で、廃業か軍需産業への転向を余儀なくされます。また労働力確保のため徴用や学徒動員が強制的に行なわれました。ここでは戦時下

に揺れた「ミシン村」の埋もれた歴史を紹介し、徴用と学徒動員の実態や戦災資料を展示します。

V うつりゆく町工場―戦後から今―

戦後から現在までの工場の変遷を統計グラフから見えていくとともに、CDの出現まで日本中の音楽愛好家に使われていたレコード針のナガオカの戦後のあゆみなどを紹介します。



ミシン村の工場の学徒動員 昭和19(1944)年頃 国保義定氏提供

なお、特別展開催にともなう記念事業については、本誌八頁をご覧ください。会期中の皆様のご来館をお待ちしています。

(横山)

郷土資料館 なんでもQ&A

Q 西武池袋線の池袋駅と椎名町駅の間にかつてもう一つ駅があったと聞きましたが、本当ですか？

A 本当です。上り屋敷駅という駅がありました。上り屋敷駅は、一九二九(昭和四)年四月一五日に開設されました。

現在の西武池袋線は一九一五(大正四)年に池袋―飯能間に開業した武蔵野鉄道が前身です。武蔵野鉄道株式会社は、一九四五年に西武鉄道株式会社と食糧増産株式会社とが合併して西武農業鉄道となり、翌一九四六年に西武鉄道株式会社と社名変更し現在に至ります。

武蔵野鉄道の駅のうち豊島区地域には、開業時の一九一五年に東長崎駅が、一九二四年に椎名町駅が開設されました。遅れて開設された上り屋敷駅はこれら二駅に比べて利用者が少なく、一九三二年の利用者数は延べ六六万四二六二人で椎名町駅の半数にも満たない状況でした。

その後、上り屋敷駅は一九四五年に廃止されます。現在、西池袋四丁目四～五番地の線路際にある空き地は上り屋敷駅の跡です。

(伊藤)

連載 一点の資料から 《その9》 江戸情報満載の「万日記」の世界

果嶋三丁目の保坂家は、江戸時代に将軍家御菊御用を勤めていたことで知られています。同家には、御菊御用に関する記事を収録した「万日記」が残されていますが、この史料の表題が示す「万」の文言どおり、これ以外にも多くの記事が所収されています。以下、そのうちのいくつかをピックアップしてみましよう。

A 天保二(一八四二)年の大御所(第一一代将軍)家斉死去について

天保二二年閏正月晦日大御所様御(徳川)七日の間往来留、なり物五十日、普請廿日、二月廿日上野え納候、大御所様御院号文恭院様と申上ル(写真左部分参照)

B 嘉永六(一八五三)年のペリー来航について
あめりか人日本国え来ル、江戸市中大さあぎ、兜鎧新キニ出来ル、大筒いる、あめりか人こうえき願申候

C 安政二(一八五五)年の安政の大地震について
関東大じ、んにて江戸中死人凡廿五万人死す、并火事多く其内ニても本所・深川・小川町辺家々くづれ多く候、御城石垣等大そんじ

D 万延元(一八六〇)年の桜田門外の変について
御大老井伊加門守三月三日御節句御登城先雪

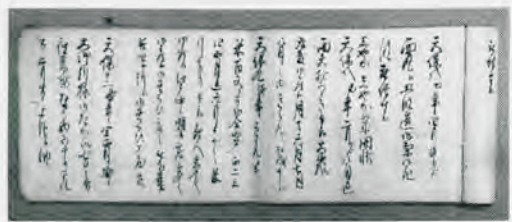
ふりにて水戸様浪人ニうたれ申候、日本国内らんの如く

このほかにも、江戸市中で頻発した火事のこと、異常気象の様子、奇人変人のことなど多岐にわたる内容となっています。そして、こうした情報は、人伝に(噂話として)、あるいは村や町にやって来た商人・宗教者から、さらには瓦版(読売)などの文字情報などがもたらしたものと考えられます。

さて、一九世紀半ば以降、江戸の情報屋として有名な人になった古本屋の藤岡屋由蔵は、こうした様々な情報を写本(手書きで写した本のこと)とし、これを貸して収入を得ていました。すなわち、人を使って情報を仕入れ、その情報を高く売る——提供者からのネタ一つを二四文から三二文で買い、それを九六文で売っていたといわれる——という方式です。このように、すでに江戸時代の終わり頃には、情報が商品価値を有し、江戸に居住する武士や町人層の広い支持を受けていたわけです。

江戸時代の人々は、自分たちの生活のため、あるいは知的欲求を満たすため多くの情報を必要とし、そしてそれを得ていました。日常の行

動範囲は、今と比べるとごくごく限られていたが、常に日本全体の政治的・経済的動向を見極めて暮らしていたのではないのでしょうか。「万日記」に記された多くの出来事の記事は、江戸時代人の情報欲求度の深さと、幅広さを示唆しています。(秋山)



「万日記」本文部分 ▼部分以降が、大御所家斉死去についての記述である。

万延2年(1861)「万日記」(保坂実氏蔵)表紙部分 表紙の年代は、万延二年正月になっていくが、記事の上限は文化期(1804~17)までとされるため、同様の帳面を書き継いだものと考えられる。

豊島区立郷土資料館からのお知らせ

★特別展記念事業開催のお知らせ

九月九日（金）からの特別展開催に伴い、左記の記念事業を開催いたします。会期中多くの方のご来館をお待ちしております。

特別展記念講演会

日時：九月十八日（日）午後二時～四時

演題：首都東京の工業化と都市問題

講師：石塚裕道氏（日本大学教授）

会場：豊島区立勤労福祉会館第6会議室

定員：五〇名（電話申し込み先着順）

特別展説明会【説明時間約六〇分】

日時：①九月一日（日）午後一時と午後三時

②一〇月九日（日）午後一時と午後三時

講師：特別展担当学芸員

会場：郷土資料館展示室にて

定員：特にありませんので、各説明時間にあわせてお越しください。

フィルム上映【上映時間三〇分】

「ダットサンができるまで―設計から試運転―」

（一九三五年日産自動車（株）制作、同社提供）

* 展示会場にて連日上映いたします。

★地域史講座「中世の古文書を読む」（全六回）

開催のお知らせ

鎌倉時代から戦国時代までの中世の古文書の

基礎的な見方、読み方を、わかりやすい解説によって学んでいきます。

日程：一〇月六日・一三日・二〇日・二七日・

十一月一日・一七日の全六回

時間：午後六時～八時

会場：豊島区立勤労福祉会館第一会議室

講師：蔵持重裕氏（立教大学講師）

定員：五〇名（原則として全回出席できる方）

申し込み：往復葉書に①住所②氏名③年齢④電話番号を記入し、九月二〇日（火）必着で当館

まで。申し込み多数の場合は抽選を行いません。

結果は返信葉書で通知いたします。

★刊行物発行のお知らせ

『郷土資料館所蔵資料目録第七集』

郷土関係図書目録Ⅰ

郷土資料館が所蔵する図書二万冊のうち、昨年

一二月までに受け入れ整理を終えた、東京都

および豊島区発行の図書資料と博物館などの刊

行物を中心に、約二千冊を収録しました。現在

図書は開架されていませんが、調査・研究の参

考資料として利用することができます。詳しく

は職員までお尋ね下さい。

〔頒価九〇〇円〕

編集後記

あつい、あつい、あつゝい夏も一段落。過ぎ去ったあつゝい夏の名残りのなか、毎号ホットな記事で一杯（を指している）の『かたりべ』35号をお届けいたします。

* * *

現在、九月九日頃から開催する特別展「町工場の履歴書」の準備を進めています。かつて池袋駅の東口に多くの鉄工所や鋳物工場があったこと、大塚駅近くに万年筆工場があったこと、長崎地区に自動車工場があったことなどが明らかにされます。というわけで、今回の特別展のキャッチフレーズは『あなたの知らない町工場の歴史がみえる』です。この秋は郷土資料館で、あなたの知らない町工場の世界に浸りながら、「町工場オタク」を指してみませんか？ 会期は十一月二〇日（日）まで。皆様のご来館をお待ちしています。

かたりべ

・ No.35

1994年9月6日
発行

豊島区立郷土資料館

・ 豊島区西池袋2-37-4

電話03-3980-2351

豊島区広報印刷物L3-06-091

本紙は再生紙を使用しています